おてんばフルーチェ姫の恋するディボーション生活

愛根

目次

おてんばフルーチェ姫の恋するディボーション生活 1

おてんばフルーチェ姫の恋するディボーション生活

ここはフルーチェ王国の王宮。

国中の人気者であるフルーチェ姫は
今日も大好きなフルーチェを食べて
ご満悦であった。

「姫、フルーチェのストロベリー味でございます。
ボナペティート（たくさん召し上がれ）です‥‥‥。」

メイド長のネーブルはフルーチェ姫から
目をそらしながらフルーチェを差しだした。

フルーチェ姫は目を輝かせた。

「ありがとう、ネーブル。
いつもフルーチェをありがとう。
こんなにおいしいものを毎日食べれるなんて
わたくしは幸せです!!」

フルーチェ姫はよくかまずにフルーチェをスプーンで
口に運び、あっと言う間にたいらげた。

そして言った。

「ネーブル、お代わりおねがい。
今度はメロン味でね。」

「かしこまりました。すぐ用意いたします。」

「ネーブルはいつ見てもかわいいね」

「///　姫様いけません、そんな‥‥‥!!」

「？」

「はっ！　　な、なんでもありません。
用意してきます‥‥‥。」

（い、いけない、ばれるところだった‥‥‥）

ネーブルはフルーチェ姫に淡い恋心を抱いていた。

（ネーブルちゃんったら、隠しててもバレバレｗｗ）

フルーチェ姫は腹黒であった。

もうこれはどっちもどっち。

「わ、私も同席してよろしいでしょうか、フルーチェ姫、
私も食べたいです」

「いいってばよ〜、デコポンちゃん、ボナペティ！！」

デコポンは剣の修行に励む姫の親衛隊長だ。

姫はいらないと断ったが、
デコポンがどうしてもというので側に置いている。

「はぁ〜、おいしい！　　これはおいしい！
おいしいねデコポンちゃん！！」

「左様でございます。姫殿下はよく
フルーチェだけで生活できますね？」

「こんなにおいしいんだからできるよぉ。
何の問題もないって！！」

「それならばいいのですが、栄養が偏りますよ？
何かお調子がお悪いところはございませんか？」

「え？　　え〜、わたし血糖値ちょっと高いし、

肩凝るし、だるいし、
でも主は私のことを愛してると信じています!!」

「そうですか、姫殿下。姫殿下は立派でございます。
一度、お医者様にかかられたらよろしいのではないでしょうか？」

「そ、そうかなぁ～。でも心配だし、行ってみるかぁ。
定期検診は大事だよね☆」

「そうです、フルーチェ姫！　　私は心配しているのですよ！
いっつもフルーチェしか食べないフルチェリアンなんて
姫しかいませんよ。
姫に万が一のことがあったら、私は‥‥‥。」

「私は？」

ネーブルの訴えにフルーチェは首をひねる。

「生きていけ.....あ、いや、なんでもないです‥‥‥。」

「ネーブルちゃん、私のこと、好き？」

「!!!!」

ネーブルは５秒固まった。

よ～く考えた後、ネーブルは静かに２回うなずいた。

フルーチェは満足した様子で言った。

「わたくしもネーブルのことが大好きですよ。
うふふ」

「‥‥‥」

その答えにネーブルは言葉を詰まらせるしかなかった。

☆　☆　☆

「ふ～ん、これはフルーチェに完全に依存してますね」

「フルーチェに依存‥‥‥私が？」

「そうですよ！　気づいてください！
完全に依存してますって！！」

フルーチェ姫たちはカンキツ中央病院に行っていた。

ネーブルは叫んだ、世界の愛の中心で。

「ふ～ん、別にいんじゃねって思うけどな～。
何か問題でもあるんですかいな？」

「それが大ありなのです。
生涯に作られるインスリンの量は決まっているのですよ、
フルーチェ姫。
このままいくとあなたは糖尿病になってしまいます。」

「ワッツ！？　なんですって！！
それは‥‥‥大変なことだわ‥‥‥」

「こうなったら完全にフルーチェをやめるしか
ないようですな。
今日から”禁”フルーチェです。」

「な‥‥‥なんですってぇぇ！！
やだ、そんなのやだぁぁ！！」

「お医者様の言うことは絶対ですよ。
ここはいうことを聞きましょう、フルーチェ姫。」

「そ、そんな‥‥‥ひ、控えるじゃダメなんですか？」

「ダメです、禁です。」

「そんなぁぁぁぁッ！！！！」

理由がわからないフルーチェ姫の絶叫はこだました。

☆　☆　☆

「うぐっ、えっぐ、フ、フルーチェ禁なんて絶対おかしいよ。
そんな世界は間違ってるよ。
オーマイゴッド（詩編３：７）‥‥‥」

「これは愛の鞭ですよ、フルーチェ姫。
それはそうとフルーチェ姫に縁談が舞い込んでますよ。
隣国のキューベース王子ですがどうしましょう。
本当にイケメンな方です。」

「ふ〜〜ん、あぁ、そう。ま、私は‥‥‥
主、主の花嫁になりたいから断っとくわ」

「え？　主の花嫁？」

「私はイエス様と婚約状態なのですよ。
これはもう結婚したくないなと。」

「そ、それでも主の御心が一番でしょう。
主はどう言っておられるのです？」

「私は主の声はあんまり聞けないけど、
したくないからしたくないの！
別にいいじゃん！！」

ネーブルは呆れながらも嬉しそうに言った。

「なんか少し安心‥‥‥。」

「え、あ、そう」

「ではディーティーエーム国に打診しておきますね。
きっと許してくださるでしょう。」

しかし、その予測はきっぱりと裏切られた。

☆　☆　☆

「我がディーティーエーム国は
フルーチェ国に対して宣戦を布告する！！」

「な、何ですってぇぇ！！」

いきなり宣戦布告されてしまった。

（だってフルーチェ姫が可愛いすぎるから‥‥‥）

キューベース王子は思った。

それはあまりにフルーチェ姫が美しかったからだ。

「こうなったらしょうがない‥‥‥
私が説き伏せて魅せます！！」

フルーチェ姫はフルーチェの成分
フルチェリンの血中濃度が不足しながらも
壇上に立った。

声明を発表するのだ。

（フ、フルーチェが足りない‥‥‥
ぜ、絶対的に足りない。
お肉なんて食べたくあらへんが
私はやり抜いてやるわぁぁ！！）

フルーチェ姫は息も絶え絶えに
言葉を紡いだ。

「え～、キューベース王子、
あなたのお気持ちはうれしいのですが、
なんか気が乗らないのです。
それだけなんです。
どうかお許しください。
しかし、私はあなたを愛しています。
女一人取るために戦争なんて
ダメですよ。
そんなの愛ではないです。
イエス様が見てますよぉぉ。
どうかやめてください。
まぁ、プラトニックなら

少しぐらいと思いますが、
そこまででしょう。
私と文通がしたいんでしょう。
ほっぺにちゅーされたいんでしょう？
叶えてあげますからよしてください。
お願いいたします。
アーメン。」

フルーチェ姫の声明は御心に適った。

そしてキューベース王子は大喜びで
宣戦布告を取りやめてラブレターを
送って来た。

戦争は簡単に回避されたが
フルーチェ姫の心は憂鬱であった。

（ああ、フルーチェが食べたい‥‥‥。
なんで食べられないんだろう‥‥‥。
神様、どうして‥‥‥。）

フルーチェ姫の心は主から離れていることに
フルーチェ姫はあんまり気づいていなかった。

☆　☆　☆

（フ、フルーチェが食べたい‥‥‥、
もうすべてが嫌だ‥‥‥。）

フルーチェ姫にとってフルーチェのない人生なんて
もう炭酸の抜けたソーダ水のようなもの。

フルーチェ姫はフルチェリンが切れ
気が沈み、デボーションをしなくなっていった。

主は悲しみ、国に雨が降らなくなってしまった。

そして数か月‥‥‥、

親衛隊長のデコポンが血相を変えて飛び込んできた。

「フルーチェ姫！　大変でございます！！
この干ばつで姫の大大大好きなフルーチェ麦が
もう取れません！
もうフルーチェが食べられないんですよ！！
困ったでしょう！！」

「な、何ですってぇぇ。
主よ、なぜですかぁぁ！！」

フルーチェ姫は主に絶叫した。

それほどフルーチェが大好きなのだ。

（これはもうディボーション。
もうディボーションに打ち込むしかない！！）

フルーチェ姫は固く心に決心した。

☆　☆　☆

フルーチェ姫は人々から遠ざかり
自室にこもり聖書を読みふけっていた。

「これはもうモノホンだわ・・・・・・
本物でしょう。」

ネーブルは言った。

「きっとフルーチェ姫は奇跡を起こしてくださるでしょう。
きっと・・・・・・」

デコポンが返した。

そして言った。

「よしっ！　私も聖書読んで祈る！　姫殿下のために！！」

「お可哀想なフルーチェ姫・・・・・・祈りましょう、みんなで！！」

☆　☆　☆

フルーチェ姫は部屋を真っ暗にして
ろうそくの明かりで聖書を読んでいた。

見かけによらず敬虔なのだ、フルーチェ姫は。

そして、イザヤ書を読んでいた時ある御言葉にぶつかった。

《そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて、主に祈って、》
イザヤ３８：２

こ、これだ！！

フルーチェ姫は即座に決心して
壁に顔を向けた。

「愛する天のお父様。
あなたの御名をあがめます。
国に雨が降らなくなってしまいました。
フルーチェ麦も取れなくなってしまいました。
これほど悲しいことはありません。
どうか雨をお降らし下さい。
そして、どうかまたフルーチェが食べられますように。
許されますように。
お願いいたします。
「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」
ヘブライ１３：５
あなたに愛されていることを信じます。
きっとフルーチェを溺愛したのがいけなかったんですね。
世をも、世にあるものをも愛してはなりません。
もし誰でも世を愛しているなら、その人のうちに
御父を愛する愛はありません。ヨハネⅠ２：１５
主は全部ご存じです。
どうか叶えてください。
主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。
アーメン。」

フルーチェ姫の祈りは主の御心に適った。

そして、その願いは叶えられた。

ザ――――――

「こ、この音は！！」

「フ、フルーチェ姫、雨です、雨！！
素晴らしいです。ハレルヤ～」

ネーブルが嬉しそうだ。

「即答の祈りとはこのことか。
主に感謝します！！」

デコポンも嬉しそうだ。

フルーチェ姫は腕まくりして言った。

「よっしゃぁぁぁぁ、これでまたフルーチェが
食べ放題・・・・・・うぇへへ」

「ドクターストップはどうするのです？」

「何とかなるって！　　祈ったから！！」

「それでは何とかなるでしょう。ハレルヤ～」

みんな、喜びでいっぱいだった。

☆　☆　☆

数か月後・・・・・・

「ふん、フルーチェを許してほしいと・・・・・・。」

「そうです、先生、私食べたいんです。」

「いやね、私もあれから考えたんだよ。
いくらなんでも禁止することはなかったかなぁって。
おやつにならいいでしょう。」

「ほ、本当ですか！！！！！！！」

フルーチェ姫の瞳は輝き、心は大喜びした。

「やったぁぁぁ、うっれしいぃぃ、幸せぇぇ」

「よかったですね、フルーチェ姫‥‥‥
これで元の通りに‥‥‥」

「イエス！！　ザッツライト！！
ハレルヤ――！！」

普段は浮かれないデコポンも嬉しそうだ。

「それではフルーチェを食べに行きましょう！！
さあさあ」

ネーブルが促す。

「よし、食べよう。それはもうお腹いっぱい！！」

「はいはい、フルーチェ姫‥‥‥」

☆　☆　☆

フルーチェ姫は恐る恐るフルーチェに手を伸ばす。

もう半年ぶりのフルーチェだ。

これはもううれしくてしょうがない。

ぱくっ。

フルーチェを一口食べてフルーチェ姫は歓喜に震えた。

「こ、これがフルーチェ‥‥‥、
な、なんておいしいんでしょう‥‥‥、
もう幸せぇぇ」

至福の表情のフルーチェ姫。

「これで一件落着ですね。
よかったよかった。」

フルーチェ姫は宣言した。

「私、フルーチェは姫の名のもとに宣言します！
この日をフルーチェ記念日としなさい！
いいですね！！」

「なんて名案なんでしょう！　　ではお触れを
発しておきますね。素晴らしいです」

フルーチェ姫の主と歩むディボーション生活は
フルーチェと共に続くのであった。

完――

あとがき

あー、面白かった。
音楽聴きながら執筆しちゃった。
フルーチェを否定しないように愛で乗り越えた。
抗精神薬を「これはフルーチェ、フルーチェなんだ‥‥‥!!」
って自分に言い聞かせて飲んでた時期があって、
それでこの小説ができました！
主よ感謝いたします！！
そして、ひどすぎるので修正を加えました。
アーメン。

ＰＳ　直してて気づいたんだけど、
　　デコポンのセリフの姫殿下はおかしい！
　　私常識がないので分かんなかった。
　　悔しい！

愛根

可愛い愛根ブログ♪

https://ameblo.jp/lapis-2019/

愛根 HP

https://aineshinestar.wixsite.com/yorokobi

おてんばフルーチェ姫の恋するディボーション生活

著　　あいね

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社